

「金曜日の本」のこと

子供のころは金曜日の放課後に、働くようになってからは仕事を終えた金曜日の帰り道に、書店や図書館に寄り道し、読みたい本をひとりで選んで抱えて帰りました。「寄り道する」ということと、「ひとりで選ぶ」ということと、「抱えて帰る」ということが大事な儀式でした。

書店や図書館は言葉でつくられた森です。その森の中から、誰の知恵も借りずに一冊の本を選び出すことは、どんなゲームよりもスリリングで、それ自体、物語のようです。選ばれる本は、そのときどきで、愉快であったり哀しかったり、晴れたり曇ったりする空に似ています。ただ、それが晴れた本であっても曇った本であっても、抱えて帰るときは、焼きたての今川焼きのように温かく感じられます。

今週の金曜日、世田谷文学館から「金曜日の本」という名のもと、一冊の小さな本と一枚のレコードを発売します。子供のころの金曜日の自分に手渡す思いでつくりました。楽しさと哀しさがひとつになったもの、天使と怪物がひとつになったもの。それが、いつも自分の探している「金曜日の本」です。

しばらくのあいだ、世田谷文学館の売店だけで販売します。

ぜひ、買いにきてください。各停電車に乗って、すこし遠回りのバスに乗って、のんびりと自転車に乗って、あるいは、てくてくと歩いてきてください。本はただそれだけのものではなく、手に入れるまでの時間や場所の記憶、道すがらに考えたこと、ひとやすみして飲んだコーヒー、急に雨が降ってきて本をかばいながら小走りになったこと——そうしたことすべてひっくるめて一冊の本だと思っからです。

吉田篤弘